

平成30年度 沖縄県学力到達度調査の結果

沖縄県教育庁義務教育課

1 趣 旨

- (1) 本県児童生徒一人一人の当該学年における一年間の学習の定着状況を把握し、各学校における授業改善の充実を図るために実施する。
- (2) 各学年の教科分析を通して、年度末において自校の落ち込みのある領域を把握し、年度初めに前学年の学習内容の習得状況を揃えるために実施する。

2 実施期日・対象学年・教科

(1) 小学校：平成31年2月20日(水)

(2) 中学校：平成31年2月21日(木)、22日(金)

対象学年	教科	対象学年	教科
第3学年	国語、算数	第5学年	国語、算数、理科
第4学年	算数	第6学年	算数

対象学年	教科
第1学年	数学
第2学年	国語、社会、数学、理科、英語

3 教科の調査結果（平成31年3月8日現在）

(1) 小学校

対象学年	教科	児童数(人)	平均正答率	平均誤答率	平均無解答率	正答率 30%未満
第3学年	国語	15,555	67.8%	28.1%	4.1%	2.8%
	算数	15,570	72.0%	25.9%	2.1%	2.3%
第4学年	算数	15,658	63.3%	34.0%	2.7%	7.7%
第5学年	国語	15,381	47.3%	43.2%	9.6%	22.9%
	算数	15,412	60.2%	35.9%	3.9%	12.0%
	理科	15,412	56.2%	38.8%	5.0%	14.5%
第6学年	算数	15,160	61.2%	32.3%	6.6%	7.9%

(2) 中学校

対象学年	教科	生徒数(人)	平均正答率	平均誤答率	平均無解答率	正答率 30%未満
第1学年	数学	13,907	51.2%	39.8%	9.0%	21.8%
第2学年	国語	14,067	57.3%	35.7%	7.0%	5.1%
	社会	14,094	41.4%	48.0%	10.6%	26.9%
	数学	14,030	53.4%	37.0%	9.6%	20.3%
	理科	14,066	43.3%	49.1%	7.6%	31.7%
	英語	14,057	54.6%	42.7%	2.7%	14.9%

4 結果の概要（正答率30%未満児童・生徒の視点から）

(1) 小学校

正答率30%未満の児童人数の割合は、小学校3年生算数の値が最も小さかった。
 正答率30%未満の児童人数の割合は、小学校5年生国語の値が最も大きかった。
 小学校5年生の実施教科で正答率30%未満の児童人数の割合が10%以上となっている。

(2) 中学校

正答率30%未満の生徒人数の割合は、中学校2年生国語の値が最も小さかった。
 正答率30%未満の生徒人数の割合は、中学校2年生理科の値が最も大きかった。
 中学校2年生国語以外の教科は、正答率30%未満の生徒人数の割合が10%以上となっている。

5 各学年・各教科ごとの状況

(1) 小3 <国語>

小学校3年生国語は、19題の設問がある。調査実施の結果、中央値が13で標準偏差が3.5であった。

25.9%の児童が、80%以上の正答率であった。2.8%の児童が、30%未満の正答率であった。小学校実施調査科目で、標準偏差の値が最も小さかった。正答率80%以上の設問が、8題あった。正答率30%以下の設問が、1題あった。条件に沿って書くことは改善傾向にあるものの、無解答率の割合が高くなる傾向がある。

(2) 小3 <算数>

小学校3年生算数は、21題の設問がある。調査実施の結果、中央値が16で標準偏差が3.8であった。

41.1%の児童が、80%以上の正答率であった。2.3%の児童が、30%未満の正答率であった。正答率80%以上の設問が、10題あった。正答率30%以下となった設問は、無かった。実施した小学校調査問題の中で、無解答率の割合が最も低かった。一方、問題文を読み取り立式したり単位換算する設問で、誤答率が高かった。

(3) 小4 <算数>

小学校4年生算数は、23題の設問がある。調査実施の結果、中央値が15で標準偏差が5.2であった。

26.7%の児童が、80%以上の正答率であった。7.7%の児童が、30%未満の正答率であった。正答率80%以上の設問が、5題あった。正答率30%以下の設問は、無かった。最も正答率の低かった問題は、平行四辺形を作図するために必要となる特徴を選択肢から選ぶ問題であった。問題文を読み取り記述形式で答える設問で、無解答率が高くなる傾向がある。

(4) 小5 <国語>

小学校5年生国語は、24題の設問がある。調査実施の結果、中央値が11で標準偏差が4.7であった。

4.3%の児童が、80%以上の正答率であった。22.9%の児童が、30%未満の正答率であった。正答率80%以上の設問が、2題あった。正答率30%以下の設問が、5題あった。条件を与えられた中で、それらの条件をクリアして書くような設問で、無解答率が高くなる傾向がある。

(5) 小5 <算数>

小学校5年生算数は、24題の設問がある。調査実施の結果、中央値が15で標準偏差が5.4であった。

19.7%の児童が、80%以上の正答率であった。12.0%の児童が、30%未満の正答率であった。正答率が80%以上の設問が、5題あった。正答率30%以下の設問が、1題あった。目的に応じて数学的に説明するような設問で、無解答率が高くなる傾向がある。

(6) 小5 <理科>

小学校5年生理科は、27題の設問がある。調査実施の結果、中央値が16で標準偏差が5.7であった。

14.4%の児童が、80%以上の正答率であった。14.5%の児童が、30%未満の正答率であった。小学校実施科目で、最も標準偏差の値が大きかった。正答率が80%以上の設問が、1題あった。正答率30%未満の設問が、3題あった。事象を科学的に考察し説明するような設問で、誤答率が高くなる傾向がある。

(7) 小6 <算数>

小学校6学年算数は、20題の設問がある。調査実施の結果、中央値が13で標準偏差が4.3であった。

26.6%の児童が、80%以上の正答率であった。7.9%の児童が、30%未満の正答率であった。正答率が80%以上の設問が、5題あった。正答率が30%以下の設問が、2題あった。三角形の決定条件を選択する設問で、最も誤答率が高かった。目的に応じて数学的に説明するような設問で、無解答率が高くなる傾向がある。

(8) 中1 <数学>

中学校1年生数学は、20題の設問がある。調査実施の結果、中央値が10で標準偏差が5.1であった。

18.8%の生徒が、80%以上の正答率であった。21.8%の生徒が、30%未満の正答率であった。正答率が80%以上の設問が、3題あった。正答率30%以下の設問が、1題あった。一次式の減法の計算を行う設問で、最も誤答率が高かった。目的に応じて数学的に説明するような設問で、無解答率が高くなる傾向がある。

(9) 中2 <国語>

中学校2年生国語は、25題の設問がある。調査実施の結果、中央値が14で標準偏差が4.2であった。

10.7%の生徒が、80%以上の正答率であった。5.1%の生徒が、30%未満の正答率であった。正答率が80%以上の設問が、7題あった。正答率が30%以下の設問が、4題あった。中学校実施調査科目で、標準偏差の値が最も小さかった。目的に応じて文章を読み、内容を整理して書く設問で、最も誤答率が高かった。文脈に即して、漢字を正しく読むことはできるが、文脈に即して、漢字を正しく書く設問で無解答率が高い。

(10) 中2 <数学>

中学校2年生数学は、20題の設問がある。調査実施の結果、中央値が11で標準偏差が5.3であった。

22.3%の生徒が、80%以上の正答率であった。20.3%の生徒が、30%未満の正答率であった。正答率が80%以上の設問が、1題あった。正答率が30%以下の設問が、4題あった。図形の性質の証明を読んで新たな性質を見だし、成り立つ理由を数学的な表現を用いて説明する設問で、最も誤答率が高かった。目的に応じて数学的に説明するような設問で、無解答率が高くなる傾向がある。

(11) 中2 <理科>

中学校2年生理科は、24題の設問がある。調査実施の結果、中央値が10で標準偏差が4.9であった。

4.1%の生徒が、80%以上の正答率であった。31.7%の生徒が、30%未満の正答率であった。正答率が80%以上の設問が、1題あった。正答率が30%以下の設問が、6題あった。飽和水溶液について質量パーセント濃度の計算をする設問で、最も誤答率が高かった。事象を科学的に考察し説明するような設問で、無解答率が高くなる傾向がある。

(12) 中2 <社会>

中学校2年生社会は、30題の設問がある。調査実施の結果、中央値が12で標準偏差が5.6であった。

3.2%の生徒が、80%以上の正答率であった。26.9%の生徒が、30%未満の正答率であった。正答率が80%以上の設問が、2題あった。正答率が30%以下の設問が、10題あった。アフリカ州でサバナ気候の特色と地図中の位置関係について理解しているのかを問う選択肢の設問で、90%近い生徒が誤答であった。「朝廷」「モノカルチャー」「御成敗式目」「自由民権運動」など、基礎的・基本的用語を記述で問う設問で、無解答率が高くなる傾向がある。

(13) 中2 <英語>

中学校2年生英語は、45題の設問がある。調査実施の結果、中央値が24で標準偏差が9.8であった。

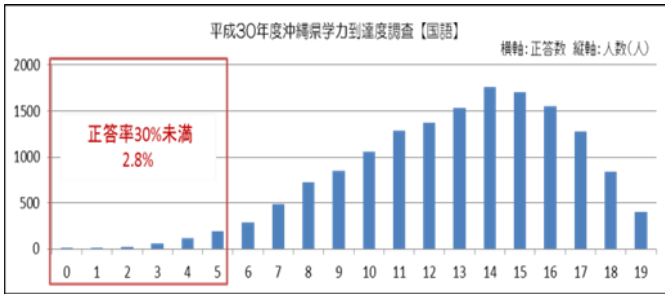
15.6%の生徒が、80%以上の正答率であった。14.9%の生徒が、30%未満の正答率であった。正答率が80%以上の設問が、4題あった。正答率が30%以下の設問が、5題あった。中学校実施調査科目で、標準偏差の値が最も大きかった。リスニングの設問で、最も誤答率が高かった。条件に従って、正しく英文を書くことができるかを問う設問で、無解答率が高かった。

6 集計結果（正答数の度数分布のグラフ）

(1) 小学校

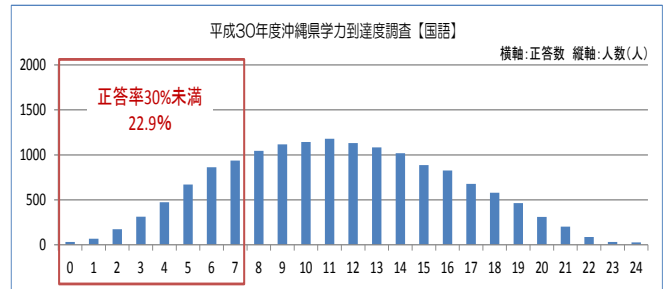
【小3国語】

平均正答数	平均正答率
12.9/19	67.8%



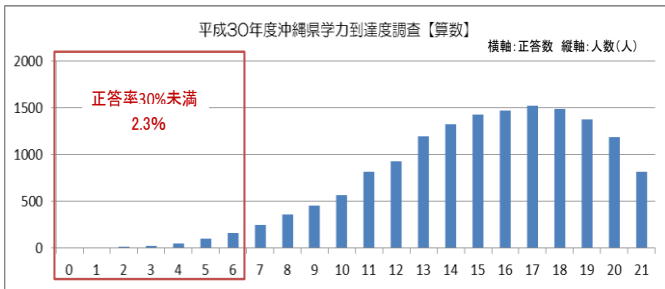
【小5国語】

平均正答数	平均正答率
11.3/24	47.3%



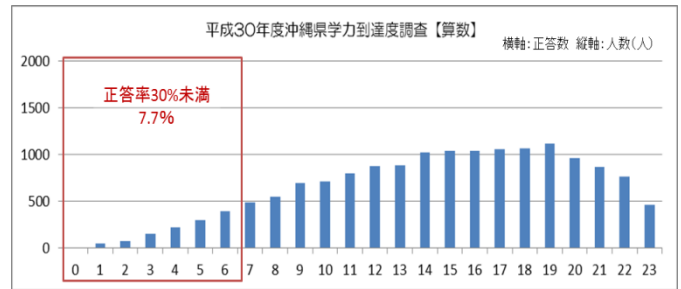
【小3算数】

平均正答数	平均正答率
15.1/21	72.0%



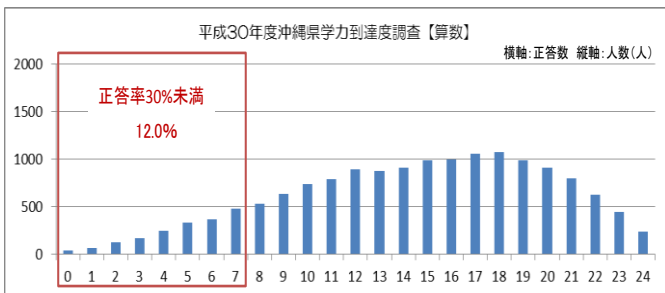
【小4算数】

平均正答数	平均正答率
14.6/23	63.3%



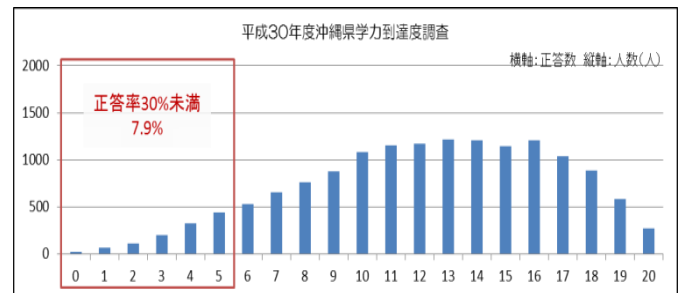
【小5算数】

平均正答数	平均正答率
14.4/24	60.2%



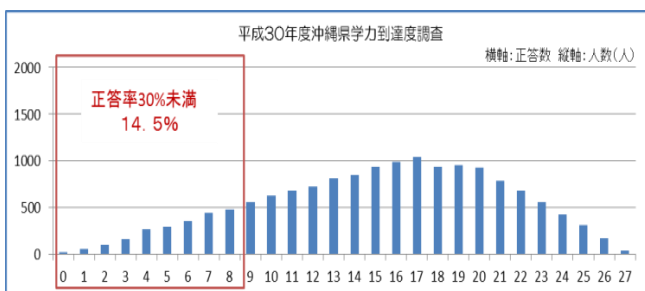
【小6算数】

平均正答数	平均正答率
12.2/20	61.2%



【小5理科】

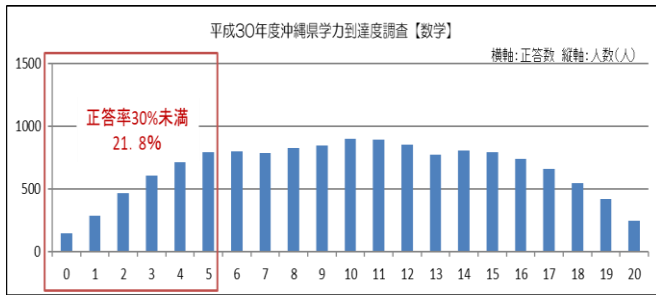
平均正答数	平均正答率
15.2/27	56.2%



(2)中学校

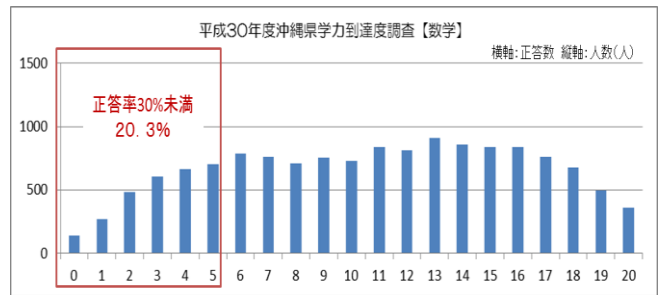
【中1 数学】

平均正答数	平均正答率
10.2/20	51.2%



【中2 数学】

平均正答数	平均正答率
10.7/20	53.4%



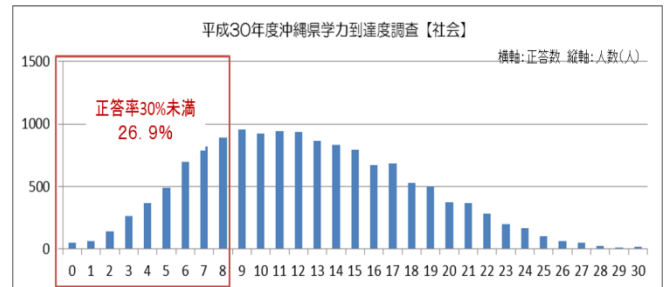
【中2 国語】

平均正答数	平均正答率
14.3/25	57.3%



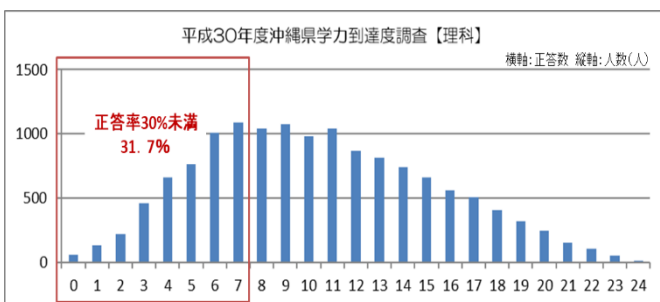
【中2 社会】

平均正答数	平均正答率
12.4 /30	41.4%



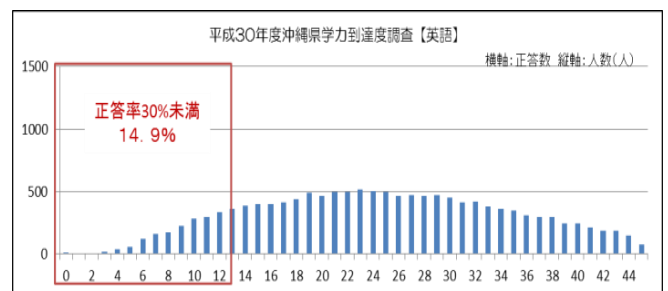
【中2 理科】

平均正答数	平均正答率
10.4/24	43.3%



【中2 英語】

平均正答数	平均正答率
24.6/45	54.6%



7 課題への対応

新学習指導要領の目指す資質・能力の育成を目指し、児童生徒に「何がどこまで身についたのか」を確認しながら必要となる授業改善を行い、児童生徒一人一人に合わせた効果的な支援を行う。

- (1) 各学校で結果分析を行い、その内容を児童生徒にフィードバックしながら日々の授業改善につなげる。
- (2) 課題がみられる設問は、その改善に向けた指導を年間計画へ位置づける。
- (3) 正答率30%未満の児童生徒への支援を行う。
- (4) 条件に沿って書くことや目的に応じて説明する学習活動を日常的に行う。